

古浄瑠璃の展開と義経像の形成

鳥居フミ子

一

浄瑠璃は中世、十六世紀半ば頃から形成されていった独特の語り物であった。矢作の宿における牛若と浄瑠璃姫の恋愛談を中心に、平曲とは一風変わった語り口で語られ、新しい時代の語り物として人々の心を把えていったのである。それは、座頭によって語られていた「平曲」の世界とは次元を異にしたロマンの世界であった。源平の合戦の中に、盛者必衰の理りをあらわすかの如くはかなく消えていった多くの武将の武勇を語り聞かせる平曲の哀調とは異り、浄瑠璃は美しい御曹子牛若と当代一の美女浄瑠璃姫との一夜の出遇いを物語る。美しい館の中に多勢の侍女にかしづかれ、管弦の音楽に興ずる姫と、笛の名手で和歌にもすぐれ、古典的教養も身につけた貴公子とのくりひろげる恋のかけひきは、まさに王朝風の世界である。

「浄瑠璃物語」の世界が形成されるに至るまでには、多くの土俗的な語り物が集成されていった過程が考えられる。室木弥太郎氏が『語り物（舞・説経）古浄瑠璃』の研究』で述べていられるように、中世の街道筋を行きかかった比丘尼や巫女や座頭などの語った数多くの語りもの、あるいは矢作地方の伝説や、鳳萊寺山麓の靈験談などが牛若と浄瑠璃姫を主人公とする物語に統合されていったのであろう。

浄瑠璃が語られていたことを伝える最初の記録は、柴屋軒宗長の「宗長日記」享祿四年（一五三一）九月十三日に、小田原の旅宿で

小座頭あるに浄るりをうたはせ

とあるのが最初である。ついで、伊勢の神官で俳人として名高い荒木田守武の「守武千句」（天文九年（一五四〇）成立）に
いとくたにさとうまかひの杖つきの

しやうるりかたれともし火のもと

こよひはや時はうしわか深はて、

とあるのがあげられる。これらの記録の中に、浄瑠璃が旅宿の徒然を慰めるために盲法師によって語られていたこと、その内容が牛若丸に關係するものであったことが分るのである。

「浄瑠璃物語」に關係する諸本は非常に多く、繪卷、奈良繪本、浄瑠璃正本と種々雑多な形態がある。『浄瑠璃物語研究』（森武之助著）、繪卷『上瑠璃』解題「浄瑠璃と『上瑠璃』と」（信多純一氏）などをはじめ諸書に紹介されているが、その代表的なものだけでも十数種を下らないほどである。これらが室町末期頃から「浄瑠璃物語」の流行につれて続々刊行され、世に歓迎されたのである。

刊本のうちで最も古いものは東大附属図書館所蔵の古活字版で、慶長末と推定される（横山重氏説）。さらに古活字版で古いものに前島春三氏旧蔵本があり、これは元和末寛永初年頃と推定される（横山重氏説）。何れも題名不明であるが、後者の註記には「十二」とある。刊本では当初より段数は十二段で、それを「十二段草子」と呼んだものと考えられる。牛若と浄瑠璃姫の恋愛談を扱った浄瑠璃節は「十二段」と呼ばれて近世初頭の巷間に流行したのである。『三壺聞書』には慶長十九年に、金沢において

「あみだのむねわり」「牛王姫」などの浄瑠璃が行われ、とりわけ「十二段」が盛んに行われたことが記されている。

才川浅野河原にて芝居を初め、をどり子、あやつり品々の見物場を立て、折々御城へ被召呼、吉松が立舞、あみだのむねわり、牛王の姫などいふ浄るり也。別して浄瑠璃姫の十二段、此の時分専ら盛に時行ければ、山里までも口ずさみ（三壺聞書）

「十二段」の浄瑠璃は慶長の頃すでに都から離れた地方都市金沢でも「専ら盛に時行^{はや}り、山里にまで口ずさまれるようになっていたのである。関ヶ原の戦が終つてようやく平和を迎えるに至つた近世初頭の民衆の間に、牛若と浄瑠璃姫の恋物語を語る浄瑠璃節が如何に歓迎され、浸透していったか、この『三壺聞書』の記事は如実に物語っているのである。

それでは、近世初頭に語られていた「十二段」の内容は如何なるものであつたらうか。現存の浄瑠璃物語の諸本の間には、細かくみるとその内容に出入りが多く、多様である。それは浄瑠璃姫物語生成の過程とも關係があると思われるが、大体近世初頭には定着していたと^{注一}考えられる。即ち、この物語は牛若と浄瑠璃姫との恋物語である。矢作の宿で美しい浄瑠璃姫を見染めた御曹子牛若は激しく求愛するが姫はなかなかなびかない。しかし、牛若の熱意と教養が遂に姫を動かして恋は成就する（主部）。翌朝東下

りをした牛若は吹上の浜で病氣のために死に瀕したが、牛若のあとを追ってきた姫によって奇蹟的に救われる（吹上）。奥州秀衡のもとに下った牛若は、その後平家追討の軍をひきいて再び矢作を訪れ、姫の墓に詣でる。その時墓が砕けて飛び散り、御曹子の供養によって姫は成仏する（五輪砕）。以上が物語の大筋である。

後半の吹上と五輪砕は、主部の恋愛談に対して異質で、後からつけ加わったものと考えられるのであるが、近世初頭に語られていた浄瑠璃の「十二段」は、既にこれらの諸要素を具備したものであった。^{注一}近世初頭の人々の親しんだ浄瑠璃節の「十二段」は、矢作の宿で御曹子が姫を見染め、一夜の契りを結び、やがて吹上の浜での遭難となり、五輪砕きに終るという内容のものであったと考えられる。そこに繰り展げられる世界は、王朝貴族の甘美な恋物語の世界である。御曹子牛若は美しく教養のある貴公子であり、浄瑠璃姫は古今東西に類のない絶世の美女である。寛永期の成立と考えられる熱海美術館所蔵の絵巻「上瑠璃」に繰り展げられる目をみはるような華麗な世界……それは浄瑠璃物語によって構成されていた近世初頭の「十二段草子」の世界を描出しているのである。

二

浄瑠璃物語は創始期の浄瑠璃を代表するものであり、中世末期より近世初頭にかけて歓迎されたのであったが、やがて時代はこれだけでは満足せず、さらに多くの変化を求めようになる。浄瑠璃節による新しい題材への試みが始められるようになるのである。「故郷帰の江戸咄」はその間の事情を次のように伝えている。

六字南無右衛門といへる。女太夫かたりけるとき。十二段斗は。はや人の聞ふれて。めづらしからざるとて。舞にまふ。やしまたかだち。そがなとを。彼ふしにかたりける故に。上るりぶしに。やしまをかたる。高だちを語ると言てより。をのづから其名になりたると也。（故郷帰の江戸咄）

六字南無右衛門は寛永の頃からもてはやされた女太夫である。「十二段」ばかりでは人々が聞きなれて珍らしくなくなったというので、幸若舞の八島や高館などを浄瑠璃節に語ったというのである。

六字南無右衛門の語った「八島」の内容について考えてみよう。岩瀬文庫蔵、笠亭仙果の写本「やしま」四段は、南無右衛門の正本の上巻を写したものである（『古浄瑠璃正本集第一』所収）。

御曹子の奥州下りから語り起し、若君の上洛に際し佐藤次信忠信兄弟が召され、父の荘司が兄弟をなつかしみつつこがれ死ぬまでが描かれている。そして、写本作成者仙果は、南無右衛門正本に

はこのあとに続くべき部分のあることを述べている。滝田英二氏蔵「下り八島」八段（貞享頃・滝田氏推定）は、この南無右衛門正本の後を補うものとして注目される。即ち、氏の紹介および若月保治氏の同書の翻刻によれば、前半四段までは仙果の写本と同一文である。したがって、滝田氏蔵本八段本の「下り八島」は南無右衛門の語った「八島」の内容を伝えるものと考えられるのである。

「下り八島」の内容は次のようである。

- 初段 秀衡入
- 二段目 若君西上
- 三段目 兄弟門出
- 四段目 莊司悶死
- 五段目 冷泉再会
- 六段目 墓所問答
- 七段目 嗣信身替
- 八段目 嗣信最後

「下り八島」の主軸は、若君に召された佐藤兄弟の忠節と、それにまつわる肉親の哀話である。それに御曹子と浄瑠璃姫の悲話をからませている。

七段目・八段目は舞曲「八嶋軍」の詞章とそっくり同じである。

舞曲「八嶋軍」の、山伏姿に身をやつした義経主従が、佐藤兄弟の母に生前の兄弟の忠節を語って聞かせるという設定を外して、時間的経過の中に置いていく。即ち、嗣信の身替りから壮絶な最期までが思い出として語られるのではなく、直接に眼前に展開されているのである。それは本作が果した舞曲「八嶋軍」からの重要な展開であったといえよう。

五段目・六段目は「十二段草子」の五輪砕きの段に相当する。しかも、その詞章も「十二段草子」からそっくりとってきたものらしく、熱海美術館蔵の絵巻「上瑠璃」の「五りんくだき」の詞章とほとんど一致している。両者の前後関係についてはいろいろ考えられるであろうが、問題はこの二段に突如として「十二段草子」の世界が出てくるという点である。ここで佐藤兄弟の話が中断されて五輪砕きの場面となり、そのあと急に佐藤兄弟の話に戻るようになっていく。この「十二段草子」の世界は、南無右衛門も既に何度も語りなれたものであり、聴衆もききなれた親しんでいたものであった。南無右衛門は浄瑠璃節に語るための新しい題材を舞曲「やしま」に求め、当時既に行われていたであろう「莊司物語」などの「やしま」関係の語り物をなймаせて一曲としたのであろう。^{注五} その場合に、聞きなれた「十二段草子」の世界をとり入れることで興行的成功を期待したものと推定される。そこに、

いまだ「十二段草子」の世界から離れ切ることの出来なかつた江戸時代初期の浄瑠璃界の姿をみる事が出来るのである。

このような「下り八島」に登場する義経は、所謂浄瑠璃「十二段草子」の世界の義経である。御曹子・若君と呼ばれる王朝風の貴公子である。それは舞曲や戦記物語に登場する武将としての義経とはかけ隔つたものである。「下り八島」は舞曲の世界をとり入れたのであつたが、それは恣意的であり、「十二段草子」の世界の優位のために、新しい義経像を形成することにはならなかつたのである。

三

次に「十二段草子」の世界から離れて、新しい義経像を形成した段階を考えてみたい。それは江戸で金平浄瑠璃が流行した直後にみられると思う。貴公子としての牛若に代つて、武将としての義経が登場するのである。

土佐少掾正本に「のぼり八嶋」がある。瀧田英二氏所蔵、絵入り六段本で、題簽に「大やしま」、土佐少掾橘正勝とあり、奥書に大伝馬二町目木下甚右衛門板とある。木下甚右衛門が小伝馬三丁目に移転する前の板行であるので、貞享末から元禄初年のものと考えられる。^{注六}さらに、この作の四・五・六段の詞章をそのまま

とっている「源平兵者揃」が貞享三年以前の作であることからも^{注七}本作は貞享末年には作成されていたものと考えられるのである。

本作の内容は、義経の奥州拳兵から壇の浦における平家討滅までを扱ったものである。外題「大やしま」の両脇に、「よりともしつねたいめん」「みかわりつきのふ」と小書きにしている。先行の八島関係の語りものの中で、特に本作が見せ場として強調したかった内容を示したものである。前掲の南無右衛門正本と考えられる滝田本「下り八島」と本書とを比べてみると、次のような異同がみられる。

下り八島(南無右衛門正本) のぼり八嶋(土佐少掾正本)

(初 段) 秀衡館入り

(二 段 目) 若君西上

(三 段 目) 兄弟門出

(四 段 目) 莊司悶死

(五 段 目) 冷泉再会

(六 段 目) 墓所問答(五輪碎)

(七 段 目) 嗣信身替

(八 段 目) 嗣信最期

(初 段) 義経西上

(初 段) 義経西上 兄弟門出

(二 段 目) 頼朝義経対面 莊司悶死

悶死

(三 段 目) 勝浦上陸 次信身替

(四 段 目) 次信最期 太夫黒引

(五 段 目) 景清鍛引 義経梶原

先陣争 主上入水

(六 段 目) 教経奮戦 平家滅亡

義経帰洛

「のぼり八嶋」では「下り八嶋」の初段・五段目・六段目が省かれ、「下り八嶋」の結末嗣信最期のあとに太夫黒引き廻しの場面をつけ加え、さらに五たんめ・六たんめで、壇の浦の合戦における平家滅亡までを扱っている。

「のぼり八嶋」の大きな特色は、「下り八嶋」で混在していた「十二段草子」の要素が全くなっていることである。莊司の死から屋島の合戦に続き、次信の忠節に展開する。「下り八嶋」にはさまれていた五輪砕きの場面が省略され、佐藤兄弟を主人公とする話として一貫したものになっている。また「下り八嶋」初段の奥州秀衡館入りも省かれ、直ちに義経の挙兵から話が始まっている。奥州下りの場面も「十二段草子」によって馴れ親しんだ場面であった。「のぼり八嶋」がこれらの場面を省略したことは、この作が「十二段草子」の世界から離れた所で制作されたということである。それは義経が登場する浄瑠璃でありながら「十二段草子」離れという現象を起しているという観点からとらえることができる。

「のぼり八嶋」の内容は、義経の旗挙げから始まって平家討滅・帰洛に至るまでを扱っている。それは「十二段草子」の世界ではなくて、「平家物語」や「源平盛衰記」舞曲「八嶋軍」の世界である。「十二段草子」から離れた義経像を、これらの戦記ものに求めたのである。「下り八嶋」の五段目・六段目に扱われてい

た五輪砕きの場面を、佐藤兄弟の忠節を主軸とする話の中にそのまま混在させることは、もはや近世の合理精神は許さなくなっていたのである。その反面、「下り八嶋」では扱われていなかった頼朝義経対面の場を強調することによって、「のぼり八嶋」は、中世的浪漫的「十二段草子」的世界から離脱して、源氏の大将義経の物語としての存在を主張しているといえよう。

「下り八嶋」は次信が弟の忠信に遺言を残して息を引き取る所で終わっている。滝田氏はこれまでを上巻・中巻に当たるとされ、原型には下巻に当る四段があったと推定して^{注八}いられる。しかし、元来南無右衛門正本は上下二巻の八段本であって、これで完結していたと考えた方が妥当のようである。室木氏の云われるように、^{注九}滝田氏のあげられた理由は十二段本であったとするには積極性が乏しいようである。この八段本は、古浄瑠璃の基本型である上下各四段ずつから成る八段本の一つと考えられるのである。

「のぼり八嶋」には、「下り八嶋」の次信最期のあとに、義経が次信の菩提を弔って、生前望んでいた名馬太夫黒を引き廻す場面がつけ加えられている。この場面は、君の身替りとなって雄々しく死んでいった次信の死骸の周りを、義経が「命の恩を報ぜん」と自ら馬の水鞆みずつぎに手をかけてひきまわす所で、極めて感動的な場面である。忠臣の死をいたむ大将の姿が惻々と人々の胸を打つ。

次信の霊は慰められて余りあるものがあつたであらう。

義経が自己の身替りとなつた忠臣に愛馬太夫黒を与えたという話は「平家物語」や「源平盛衰記」にもみえている。

「唯今死ぬる手負ひに、一日経書いて弔ひ給へ」とて、黒馬のふとうたくましきに、よい鞍置きて、彼の僧にぞたびにける。

(平家物語)

斯る折節なれば無力、此馬鞍を以て、御房庵室にて卒都婆経書、佐藤三郎兵衛尉継信、鎌田藤次光政と廻向して、後世を弔給へ

とて、舍人に引せて僧の庵室に被送り。(源平盛衰記)

このような簡単な描写ではあるが、情深い義経の一面を語る逸話として記されたのである。舞曲「八嶋軍」ではこの場面は非常にくわしく語られて、感動的な名場面となっている。「のぼり八嶋」のこの場面の詞章は、ほとんど舞曲「八嶋軍」の詞章と一致しているのである。そして、

めいはおんのためにつかはす、いかにもしする事をいたむまし、
本てうのぎけいは、ちう有侍に太夫くろをひかれたり、是を見
る人々いよ／＼いさみ給へとて、次のふかさいこを上下ばんみ
んおしなへてみな、かんせぬ人こそなかりけれ

と結んでいる。このような情深い主君の姿をまのあたりにみて、なみいる人々は哀心から君への忠を誓うのである。

「のぼり八嶋」は「十二段草子」離れの世界で脚色され、そこに武将としての義経が一代記風に登場している。その義経は、臣下の忠節に深く感じ、それに適確な対応をする主君である。死にゆく忠臣の頭を膝に抱いて涙する義経であり、その死をいたんで自ら愛馬をひく義経である。中世軍記物の義経が持っていた智謀にたけた闘う武将としての性格は影をひそめて、臣下に対してやさしいいたわりを示す、情愛に富む性格が強調されているのである。

四

「のぼり八嶋」を語った土佐少掾が江戸の浄瑠璃界で活躍をはじめるのは延宝三年頃からである。^{注十}『松平大和守日記』^{注十一}には延宝六年正月六日の条に土佐少掾によって「八嶋」が上演された旨が記されている。この時の上演は五段までが記されているので、六段構成の「のぼり八嶋」がそのまま上演されたとは断定しかねるが、何らかの關係があつたと思われる。「のぼり八嶋」は延宝から貞享に至る頃、土佐少掾によって語られたものである。これは土佐少掾としては極く早い時期の、受領後問のない頃の語りものであつたのである。

延宝から貞享に至る時代は四代將軍家綱から五代將軍綱吉に至る時代で(延宝八年家綱歿)、幕府の専制体制は次第に強化され、

封建的な強固な地盤を固めつつあった頃である。武家諸法度の改訂、^{注十二}中央集権体制の成文化、身分制度の固定化の中であって、人々の自由は束縛され、武士社会においてさえ武力による自己主張は望み得べくもない夢となっていた。^{注十三}封建体制の強化の下に俸祿生活者と化してしまった武士階級の息詰るような沈滞を元祿文化の底流に読みとることが出来るのであるが、延宝から貞享に至る時代は、このような元祿時代への過渡的時代ということが出来る。

関ヶ原の戦より約七十年を経て、世代はようやく交替の時期を迎えていた。安定化していこうとする社会にはもはや武力によって正義を主張した武将の活躍は現実にはあり得ないロマンとなった。強固な秩序の固められてきた武士社会に必要なのは、戦場で率先して戦う、武勇のほまれ高い武将よりは、臣下の忠節をくみとり、それに適確に対応する情愛深い主君である。「のぼり八嶋」に見られた情の義経像は、このような時代の要求に應えるものであったのである。

封建社会においては、「君君たらずとも臣臣たらずるべからず」式の武士道が求められたのであったが、やはりそれは理想的な君臣の間柄でないことは誰の目にも明らかである。元祿期を迎えんとする頃の古浄瑠璃には、しばしば君臣の道を説く言葉がくり返

される。君は上にあつて情深く、臣は下にあつて忠節を尽くす、そこに天下泰平の理想郷が実現すると説くのである。しかも、君が上にあつて慈愛深くあつてこそ始めて立派な臣下が存在するといふのである。そのような主君をいただくことが、臣下としての道のみを一方向的に強制されようとしていた当時の武士階級をひっくるめた一般大衆の願望であつたのであろう。土佐少掾正本「坂東安房国立山城攻」（貞享三年三月以前）の冒頭は

さても其後、それ天はかろくすんでのぼり、地はおもくにござつてきたる、かるがゆへに、上じんをこのんでたつとければ、しもぎをまもつてつつしむ、爰を以て、君臣是にていして国家をたもつ

という言葉ではじまっている。時代はやや下るが、同じ土佐少掾の正本「義経記二之巻」（元祿二年刊）の冒頭もこのような言葉ではじまっている。

つらくおもんみれば、君しんをつかふに、れいを以てすれば、しん君につかふまつるに忠をつくす、かるがゆへにくんしんがつていするときんは、国たいらかに家とくのふと見へたり

（義経記二之巻）

このような「君君たれば臣臣たり」の思想は、金平浄瑠璃にもしばしば説かれるところである。

かみにあつては。其まつり事を、たゞしく。しも。其のりをあ
いませば。こつか。まさにたいらか也。

(よりちか二どのぎやくしん)

そもく君として、下をなで、しんとして、かみをおかさざれ
ば、かならすこくかおだやかなり

(公平花だんやふり)

それおもんみるに、君かみにあつて、まつり事すなをなれば、
くにとみ、たみやすし、君下のれい、たゞしからざるときんば、
かならす、こつかみだるゝ也

(すがはらのしん王)

金平浄瑠璃の最盛期は寛文四・五年を中心とする僅か数年間の
短い期間であつた。金平浄瑠璃を語って一世を風靡した丹波少掾
は、土佐少掾にやや先行していた。土佐節は金平浄瑠璃のあとの
江戸の浄瑠璃界を風靡したのであつた。金平浄瑠璃は、時の権力
者徳川將軍を代弁する源家と、その下に仕える四天王が、叛乱す
る者を平定し、怪異を滅ぼし、天下国家の安泰を回復するという
筋のものである。主君頼親の下で四天王が存分の働きをする。金
平の剛勇や竹綱の智謀が豪快に描かれる。主君は情愛深く四天王
達の活躍をみつめ、功成つた時はこれに褒美を与え、その老臣の
死に逢つては悲嘆の涙にくれる(公平かぶとろん)。こういう君
臣の關係が金平浄瑠璃の世界であつた。

「のぼり八嶋」の義経像は、このような金平浄瑠璃的世界が、

下層武士階級を含む一般市民階層の中に浸透して行つたところに
求められた姿であつた。そこに登場した義経は「十二段草子」の
ようにみゆるわしい貴公子ではなく、教経をして

九郎はせいちいきき男の、いかにも色しろからん成が、向ばそ
つて小男也

(「のぼり八嶋」五たんめ)

と云わしめたようなむくつけき男であつた。それは『平家物語』
が

九郎は勢せ小さき男の色白かなるが、むかばの少しあらはれて、
殊にしろかなるぞ

と伝える男と同類であつた。しかも、そのようなみめかたちの美
しくない義経を、情愛あふれる主君として把えているのである。

このような義経の情愛の面が継承されて、この後の浄瑠璃や歌
舞伎の世界が形成されてゆくのである。「吉野忠信」や「義経千
本桜」「御所桜堀川夜討」「一谷嫩軍記」などの名作に登場する
義経は、自ら戦う武将ではなく、臣下の働きを見守る情愛深い主
君として定型化していくことになるのである。

(追記) この論稿は日本文学科新任講演の原稿をもとにしたも
のである。

注一 「語り物(舞・説経)の研究」室木弥太郎氏著

二 同右

- 三 『演劇史研究』Ⅲ所収「下り八島上り八島の全貌」、『文学』第三卷第七号所収「上り八島下り八島の再検討」
- 四 『近世初期国劇の研究』若月保治氏著
- 五 室木氏前掲書（注一）
- 六 拙著『土佐浄瑠璃正本集第三』解題参照
- 七 同右第一解題参照
- 八 滝田氏前掲論文（注三）
- 九 室木氏前掲書（注一）
- 十 『鳥取池田藩御祐筆日記』延宝三年五月十六日、同九月六日の条に太夫土佐とある。
- 十一 『近世初期国劇の研究』所収本による。
- 十二 寛永十年代における、幕府による武家諸法度の改訂。
- 十三 辻達也氏著『日本の歴史13』（中公文庫）参照

（本学教授）